

初心に戻り、チャレンジ精神を今一度

Back to the Basics - We Must Not Forget Our Challenging Spirit

川田テクノロジーズ株式会社 代表取締役社長
 川田工業株式会社 **川田 忠裕**
 President, KAWADA technologies, inc.
 President, KAWADA INDUSTRIES, INC. Tadahiro KAWADA



2009年2月27日、川田グループの純持ち株会社である川田テクノロジーズ株式会社（KTI）が東証・大証に上場し新体制のスタートとなりました。

これを機に、グループとしての経営理念を「安心で快適な生活環境の創造」、社員ひとりひとりの行動指針として「独創自立」、「高い品質と顧客満足」、「マーケット志向とグローバル化」、「コンプライアンス」、「環境保全」と定めました¹⁾。これらは、もともと川田工業が採用していたもので何も変わっておりません²⁾。

川田グループは、技術をもって立つ企業集団であります。経営理念にもとづく活動を継続するために、行動指針に忠実に、技術の研鑽に努め、新しい未知の世界に挑戦し続ける文化を持続、強化することが必要です。

川田技報は、今から32年前の1978年から、その時代に川田グループがチャレンジしてきた技術の実績をまとめたものですが、その記念すべき第一号の実績紹介カラーグラビアのトップバッターは、橋梁ではなく、中近東・カタル国のホテル・会議場の鉄骨の製作・施工でした。2ページにわたって総重量8 810トンの構造物が紹介され、さらに、16ページにもわたる論文や報告が紹介されています³⁾。

勿論、国内の橋梁の紹介がいくつもありますが、その他に米国のミズーリ・リバー鉄道橋（2 917.1トン）、アーカンソー橋梁（13 110トン）等も紹介されていま

す。当時の川田忠樹社長の「技術にロマンを」という題の巻頭言も「1978年6月1日クウェートにて」⁴⁾とある通り、そのころの川田工業は、世界を市場として仕事をしてきたことがうかがえます。

川田技報・第一号に載っているこの他の論文や報告の内容は、鋼橋だけではなくPC橋、民間鉄骨の工事報告、構造解析、プレビーム工法、有限要素法による解析のこと等が書かれていますが、若さとバイタリティーに富んだ内容であり、現在の川田グループの重鎮となっている人たちがこの時代に活躍していたことをみると、川田グループの実績・技術の基礎はこの時期に飛躍的に伸びていったことがわかります。

当時は、オイルショックの影響から本州四国連絡橋の着工が先延ばしになるなど国内市場が冷え込む中で、川田工業については売上が1975年度の約147億円から1978年度の約240億円と、飛躍的に業績を伸ばしています。それでも、現在の連結グループと比較すると1/5～1/4程度の規模の会社でしたが、川田グループは活動の場を世界市場に求め、冒頭に示した現在の経営理念・行動指針にほぼ当てはまる仕事をしてきたことがわかります。

実は、川田技報が出来る前に「川田工業研究室報告」というのが1974年の4月に発行されていました。その報告の冒頭に、当時の川田工業研究室長でありコンピュータ技術の大家であられた故大地羊三先生の「- 研究は失敗の連続 -」と題された巻頭言が載っています。大

地先生の言葉をそのままここに載せます：

「研究は失敗の連続です。初めから結果が解っているならば、問題にする必要はないでしょう。解らないから色々考えて実行してみるわけです。一度失敗した方法はさけるでしょうから、失敗の数の多い人ほど成功する機会が多いという逆説も成り立つわけです。一度も失敗したことのない秀才には、大きな仕事はできません。」⁵⁾。

もちろん、事業は研究活動とは違いますから、大きな失敗をいくつも繰り返すわけにはいきません。しかし、大地先生が書かれたことは、我々のビジネスにも多々適応する言葉です。

鋼鉄橋梁、PC・土木、鉄構、建築の各事業は、今でこそ川田グループのコアビジネスとなっているわけですが、全て戦後にゼロから始めたものばかりであり、先輩方が勇気を持って新しい事へチャレンジしてきたからこそ出来たものです。逆に、現在の川田工業の事業内容の大部分がいまだにこの延長上にあるということは、「現在の川田グループは先輩方の努力・功績の上に乗っているだけ」とも言えるかもしれません。

もちろん、これまで川田グループが挑戦したものが全てうまく行ったわけではありません。実際に、1970年代に産業廃棄物処理装置等を扱っていたプラント事業や1980年代～1990年代のヘリコプタの機体販売・操縦訓練事業からは撤退しています。しかし、それらにチャレンジしたことにより、生産・工事現場の機械化や次世代ロボット技術等に繋がったとも言えます。

現在の川田グループの事業範囲は当初の鋼鉄構造物及び土木・建築関係からIT、機械システム、そして今後期待される環境分野にも広がっています。これらの事業は、まだまだ規模としては確立されたとは言えませんが、今のよう、不透明な時代だからこそ、今一度初心にもどり次の時代のビジネス展開に繋がるチャレンジをするべきだと考えます。

今回の川田技報には、川田グループが世界に誇るべきコアビジネスについての技術論文、橋梁の保全事業や工事現場における改善活動事例に加えて、特集のICT事業の取り組みをはじめ、ロボット技術の応用、環境事業などが掲載されており、グループの新しい技術・ビジネス

への挑戦が続いている事がわかり、頼もしく思います。

最後に、川田技報の第一号に、当時の川田忠雄取締役会長が書かれたことを紹介して締めくくりたいと思います。

「どんな事業でも技術は大切なものだが、とりわけ吾々の様な業界では技術の優劣が社運を左右すると言っても過言ではない・・・社訓にあるように、誠実であって技術的に優秀であり、これを確実に実行する一つつまり社訓の三ジツを切り離して考えることは出来ない。誠実であって確実である上に、特に技術が優秀でなければこれからの社会に生き伸び、反映して行くのは難しくなる・・・」⁶⁾。

現在、我々は先行きが不透明な時代のまっただ中にあるわけですが、川田グループの経営理念に示される活動を続けて行くために、これからも全世界の市場ニーズ、最先端の技術に敏感に、チャレンジ精神をもって伸びて行く企業集団であり続けるべく、初心を忘れずに努力を続けて行きたいものです。

参考文献

- 1) 川田テクノロジーズ株式会社 経営理念・行動指針
http://www.kawada.jp/corporate/vision.html
- 2) 「環境変化に順応できる企業でありつづけよう」
川田忠裕 川田技報 Vol. 25, 1, 2006, pp. 1-2.
- 3) 「カタール政府・ニュードーハ・ホテル鉄骨工事施工報告」
本村正俊他, 川田技報 Vol. 1, 10, 1978, カラーグラビア及び論文・報告 pp. 117-133.
- 4) 「技術にロマンを」
川田忠樹 川田技報 Vol. 1, 10, 1978.
- 5) 「研究室報告の発刊にさいして」
大地羊三 川田工業研究室報告 Vol. 1, No.1, 4, 1974.
- 6) 「川田技報発刊に際して」
川田忠雄 川田技報 Vol.1, 10, 1978.